

第 1 1 回 研 修 会 報 告

研修委員長 島村 明義

今年度の研修会は、昨年度の要望から現地集合、現地解散で実施するということを基本に据え、「熊谷の歴史や文化、自然を再認識する」というねらいの元を選定しました。

10月16日（木）、小林正俊新会長さんをはじめとする会員23名の参加を得て、無事に研修会を実施することができました。

葛和田の渡し船で利根川を渡し、対岸の群馬県赤岩町の光恩寺にある荻野吟子生家長屋門の見学と住職さんの法話をメインに据え、田山花袋など文豪に愛された老舗の割烹新田屋さんでの昼食を楽しみました。以下に研修の概要を報告します。



【葛和田の渡し】

葛和田の渡しは、熊谷市と千代田町赤岩の間を通る利根川の対岸同士を結ぶ渡し船です。県道83号線、熊谷館林線の代替渡船で、県道の一部として位置づけられる「県道扱いの渡し船」です。利根川では1つしか残っていない橋のない公道の1つで、年間1万人を超える方々に利用されているそうです。

歴史は古く、戦国時代、上杉謙信の文献にも登場します。その後江戸時代には水運が発達し、利根川を利用して江戸や房総方面との交通が盛んに行われました。江戸からの大型船の終点という河川交通の要所として、坂東16渡津に数えられ繁栄に沸きました。



しかし、長かった繁栄も明治時代の中頃までで、その後は鉄道等の交通機関が発達するにつれ急速に衰退し、渡船場としての機能だけが残りました。この渡船場も刀水橋下流に新たな橋が架けられると、廃止されるのではないかと考えられます。また、昭和の時代、利根川の砂利取り船が姿を消したため土砂がたまって水位が下がり、船底がつきそうになっていました。川底には水藻が生えているのも確認

できました。歴史と伝統ある葛和田の渡船場は、地域に残された数少ない河川交通手段として、人々に愛され、利用され続けて欲しいと思います。

【光恩寺】

光恩寺は、千代田町赤岩の利根川岸にある関東屈指の古刹です。寺伝によると、雄略天皇が穴穂宮（安康天皇）のために勅して全国に建立せられた九ヶ寺の一つとされ、推古天皇11年（603）には秦河勝を勅使として仏舎利三粒が納められたと伝えられています。（東鑑；ホームページより抜粋）

【光恩寺 本堂】

現在の本堂は明治16年に造営され、同時期に客殿、荻野吟子女史生家長屋門が移築

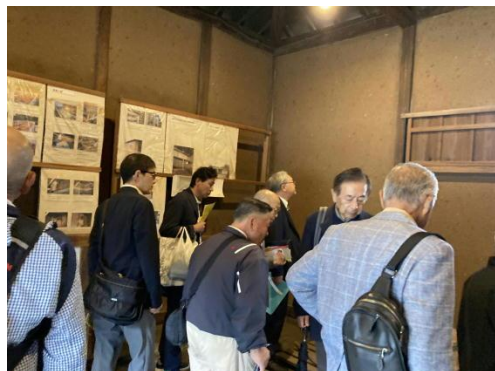


されました。明治維新の寺院統廃合により末寺26となり、その後、昭和53年に阿弥陀堂が再建され、平成に入ってから、弘法大師堂建立、本堂竜王天井画完成、荻野吟子女史生家長屋門保存修理、釈迦如来涅槃堂建立がなされました。

【荻野吟子女史長屋門】

荻野吟子は、江戸時代の末期の嘉永4年（1851）3月3日、現熊谷市俵瀬に名主荻野綾三郎の5女として生まれ、数々の困難を乗り越えて明治18年（1885）に日本公許女医第一号となりました。生家の長屋門は明治期に光恩寺に移築されました。吟子の生家を偲ぶ唯一の建築物です。住職様のお話では、当時の名主荻野家の長屋門の一部が移築されたとのことでした。荻野吟子は女医になるまではこの長屋門をけっしてくぐらないと誓いました。女子として初めて医師の試験に合格し、この「合格の門」をくぐったのではないかと思います。

長屋門の中には、当時の写真や保存修理に使われた土塀が展示されていました。こ



この土塀は、わらと土を混ぜ合わせ30cm位厚く塗り固め乾燥させたものです。風雨にも耐えられる丈夫なものだそうです。

左の写真は、吟子、母かよ、姉友子、弟益平さんです。

【新田屋】

新田屋は、江戸末期、嘉永年間創業、文豪田山花袋もあしげく通った鰻と川魚料理のお店です。田山花袋の小説の中にもお店が描かれています。また、遺墨が多数残されていて、展示してありました。右記は花袋直筆の掛け軸です。

創業以来170年間継ぎ足されたタレで焼かれた鰻を食しながら、会話も弾み和やかな雰囲気の中で親睦が深められました。

帰路は、赤岩側から参加者の半数11名が赤岩渡船に乗り、船底が川底につかないか心配しながら葛和田に無事到着しました。皆様方のご協力に心から感謝申し上げます。

